

## 『耳納風土記』 ② 正平塔～石に込められた祈り～

吉井町千年の小江の集落の中、北新川沿いの田畑の中にひっそりとたたずむ石塔があります。市指定史跡の正平塔です。この塔が建てられたのは正平18年（1363）。中世の南北朝時代のことです。南北朝時代までさかのぼる石塔は福岡県下でもとても古く貴重な物です。この石塔は誰がどうして建てたのでしょうか？まずは、うきはの中世を見ていきましょう。

吉井町は今でこそ、国道210号線沿いの筑後吉井伝統的建造物群保存地区が中心街として栄えています。吉井町が豊後街道の宿駅として栄えたのは江戸時代以降の近世のお話です。それよりずっと昔、中世には吉井の中心地はもっと山側、延寿寺付近だったと考えられます。そして当地を城下町として支配していたのが、星野氏という一族でした。耳納山麓には、妙見城など星野氏が拠点とした山城跡も多く残され、とても魅力的ではありますが、それはまた別の機会にお話ししようと思います。



▲正平塔

1336年から1392年までの間を日本では南北朝時代と呼びます。鎌倉幕府を打倒した後醍醐天皇の建武の新政に反抗する形で、足利尊氏が挙兵して北朝が成立し、後醍醐天皇は奈良県吉野に逃れて南朝が成立しました。以降、日本各地では南朝方と北朝方それぞれに分かれた地方豪族達の戦乱が頻発することになります。うきはも例外ではなく、激しい戦火に見舞われます。うきはにおける北朝方の代表勢力が問註所氏もんちゅうじよだったのに対して、南朝方の中心勢力が星野氏だったのです。このような状況下で、正平14年（1359）、大規模な戦が勃発します。関ヶ原合戦、川中島合戦と並んで日本三大合戦とも呼ばれる大原合戦おおはる（筑後川合戦）です。筑後川を挟んで両軍10万ともいわれる大軍が戦いました。久留米市や小郡市には合戦に関連すると考えられる地名が多く残っており、南朝方の菊池武光が刀の血を洗ったことが、現在の大刀洗町の由来となったと言われていることは有名です。この戦いは結果として南朝方の勝利に終わり、以降九州は13年間、南朝勢力の支配下となります。

さて、では話をもどして正平塔について見ていきましょう。正平塔には次のような銘文が刻まれています。「願以此功德、普及於一切、我等與衆生、皆共成佛道（願わくば此の功德を以て普く一切に及ぼし、我等も衆生とともに、皆共に佛道に成ぜん） 正平十八年七月十八日 調衆各敬白（調衆各々敬って白す）」しらべしゅう。銘文の最後に建立者として刻まれている「調衆」とは、星野氏と、同族の黒木氏、川崎氏の3氏を総称するものです。星野氏をはじめ彼らもまた、南北朝の動乱の中で多くの一族郎党が犠牲となりました。この銘文は法華経の一節で、数多の戦の中で散っていった南北両軍の全ての犠牲者の供養を願っていることが読み取れます。正平塔には、長年の戦乱を経験した星野氏ら調衆の、平和への願いが込められていたのかもしれません。

石には太古の昔から不思議な力が宿っていると信じられてきました。静かな田畑の中で忘れ去られたようにたたずむ正平塔は、今日も静かに祈りを捧げ続けています。

●問合せ 生涯学習課文化財保護係 Tel.75-3343

